
KAIDO ~ 峠の伝説 ~

ファルコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K A I D O 峠の伝説

【Nコード】

N 2 4 7 3 B A

【作者名】

ファルコン

【あらすじ】

群馬に住む青年永井竜太は、何ともないごく普通の高校生だったが、
だがある一日のクルマでの走りによって、走り屋の世界へと巻き込まれていく…。

日常の二次創作第三弾！！と言いつつどれもまだ完結はしてないですが…（＾―＾；）

今回は日常と頭文字Dや湾岸ミッドナイトなど、クルマ関連の物を

コラボさせた小説を書いてみました。こちらの場合によっては不定期更新となりますが当分はこちらを更新していきます。

また、これは日常や頭文字Dなどを知らなくても楽しめる内容に出来るよう、頑張りますのでよろしければ感想下さい(< | >)

なおタイトルはあるゲームと被っちゃってますがあくまでオリジナルで考えました。その被った方のゲームは全く知らないです(^ |

^ :)

ACT・i 様名のハチロク(前書き)

不定期更新ですがよろしくです m ((m

ACT・1 榛名のハチロク

闇に染まる榛名山。そこにある一台のクルマが通る。

「……!!」

ドライバーは声を上げずにハンドルを切って、まるでプロのレーサーのように榛名山のコーナーをクリアしていく。そして第三セクシヨン辺りの5連続ヘアピンカーブでは、見事に綺麗に某峠漫画でも使われている「溝落とし」のテクニクを使ってクリアしていった。ブレーキランプは尾を引き、闇の中に紅い軌跡を残してそのクルマは走り去っていった。

ここは群馬県。ここでは上毛三山の一つである榛名山がある関東北部の県だ。

ここでは榛名山の他に赤城山、妙義山など様々な峠があり走り屋の間でも人気のある県の一つである。

そこに住む青年「永井竜太」は、いつもの日常のように、朝にはすぐに目を覚まし学校へ行くための支度をしていた。

「えーと……よし、道具は揃ってるな」

竜太はカバンの中の道具を確認し、朝食を家族と一緒に摂る。

「…で、親父は昨日も走ってきたのか？」

「ああ、そうだがそれが何だ？」

「クルマで走るのってそんなに楽しい？」

竜太は父親と走りについて話している。竜太の父親は「永井隼人」。元プロレーサーでレースではトヨタのアルテッツァRS200を専門的に乗っていた。

「そりゃあ、楽しいさ。まだ竜太には分からないか？」

「分からないし分かりたくもねえ」

竜太はややキツイ口調で話す。父親がクルマ好きなのに子がクルマ好きでは無いとは…話がなかなか噛み合わない。そこに竜太の母親「永井香織」が話に割り込む。

「ふふ、でも竜太ならいつかお父さんのような走り屋になれるんじゃないかしら？」

「俺はクルマになんか興味はあまりないって！」

「まー落ち着け竜太。それよりも早くしないと学校遅れるぞ」

隼人に言われ竜太は急いで朝食を済ませた。そしてそこからまたいろいろと確認をし、家を出る。

「学校行ってくる」

「おう、行ってらっしゃい」

隼人は自分の息子を見送った。その後、二人は静かに話し始める。

「まあ…竜太が嫌って言うなら仕方ないな。走り屋の世界はそんなに甘いものじゃないしな」

「そうね…走り屋の世界は厳しいわ。竜太自身に任せましょう」

二人とも元走り屋のようだ。そして隼人はプロのレーサー、峠でも伝説の走り屋とまで言われている。竜太もそんな世界に飛び込む勇氣はあるのか…まだ分からない。

竜太の通っている高校は「時定高校」。群馬県内にある県立高校だ。時定高校自体の成績は他の高校と比べて平均的で、竜太の成績は普通だ。

その時定高校には、竜太と同じ2年生で、クラスの「相生祐子」、
「長野原みお」、「水上麻衣」、そして普通の人とはちよつと訳が違つて背中にねじが付いている「東雲なの」の四人も居る。そんな時定高校だが、いつも楽しく過ごせているだとか。

「…たく、親父も親父だ。今は道路交通法とか何とかで交通ルールが厳しくなつてんのに何だつて峠で走りたがるんだ」

道路交通法で規制が厳しくなつているとは言うものの、そこまで厳しくはなっていない。竜太自身もほんの少しだけクルマには興味があるがどうも深く興味を持つ事は出来てないようだ。

…とそこに、噂をすれば祐子がやってくる。

「竜太君スラマツパギー」

「ああ、ゆっこか。おはよう」

竜太は祐子と話しながら高校へと向かう事にした。父親の今朝の話は早く忘れたいのだろう。そこにもう一人来る。

「朝からお前らは仲が良いな」

「おい…それはどういう意味だ？海斗」

「別に意味はねえよ」

話している人物は竜太の親友の「篠崎海斗」。高校生にして免許を持っており、スバルのGDBF型インプレッサに乗っている。特別なチューンはしておらず足回りの軽いチューニングのみだ。その為馬力は280である。

「そっぴやお前はまだクルマ買わないのか？免許は持ってるのに」

「いんや、金がねえや。お前はどんなクルマに乗ってたっけ？」

「俺は青のGDBFインプだぜ。お前もそろそろ金でも貯めて買えよ。相生だっけ持ってるんだぜ」

竜太は「とりあえず今のところはクルマ買うなんて考えてない」と言い放った。

「私も早く竜太君と走りたいかなあ。私のはただのクルマ…えっと、何だったっけ」

「相生のはヴィッツRSターボだ」

「そうそう！ヴィッツだった」

「話に付いていけん…まずターボって何だよ？」

竜太は走り屋の環境に生まれながら本当にクルマに関しては疎いようだ。その竜太に海斗は呆れながらも説明した。

「お前なあ…ターボってのは過給機の事だ。こいつは馬力上げの基本だ。お前そんな事も知らねえのか？」

「生憎クルマに関してはあまり興味が無いんでな」

海斗は「もうダメだ…こいつの前ではクルマの話は止めよう…」そう思ってそれ以上話す事は無かった。そしてしばらく無言のまま、時定高校まで向かっていった。

時定高校に着くと、みおと麻衣が既に席に座っていた。

「あ、ゆっこおはよう」

「…スラマツマラム」

「みおちゃん麻衣ちゃんスラムツパギー」

「二人ともおはよう」

それぞれが挨拶を済ませると、席についた。なお、みおと麻衣、祐子は走り屋チームを結成している。その名も「榛名スピードスターズ」。何とかDの秋名スピードスターズを真似て作られたチームだ。みおは一応のチームリーダーであり、クルマは青色のRX-8に乗っている。意外に良いクルマだ。そして麻衣だが…麻衣はみおと同じくマツダ車のアテンザに乗っている。アテンザは比較的大人なセダンであり、4WD（四輪駆動）またはFF（前輪駆動）の二つがある。麻衣のそれは4WDモデルだ。車体色は銀色。

「ゆっこ、本当はロードスター乗ってるんだよね？」

「そうだけど？」

「今度のバトルは絶対ロードスターに乗ってきてよ」

「んー…そうだね。私もあまりお母さんのばかり乗っててもいけないしね」

祐子の本当の搭乗車両は赤のNA6CE型ユーノス・ロードスターだ。一応スピードスターズはマツダ車を中心として活動している為でもあるからか、みおはそろそろロードスターに乗り換えるように言った。またそのロードスターは、親戚が紹介してくれた中古車販売店にて廃車寸前のそれを見つけ実際に触ってみるとエンジンが点いた為ロードスターを無償で引き取った。

「ロードスターとかヴィッツとか…まあよく見るクルマだよな」

「そうだね。竜太君も何かクルマとか乗ってるの？」

「俺のはそんなに速いクルマじゃないし、クルマなんて面倒くさい」

竜太はそう言って話を強制的に終わらせた。竜太曰く、家にあるのは一昔前の白黒の古いクルマだとか。そんな、竜太にとっては面倒くさい話をしながら朝の時は過ぎ授業が始まっていった。

放課後……。

「んじゃ、また明日な」

「おう、またな」

竜太と海斗は帰り道が違う為、別れる事にした。

「そういえばなのちゃんはクルマ乗ってたっけ？」

「私も一応乗っていますよ」

「確かなのちゃんのは、スイフトスポーツだよ。黄色の」

「はい。はかせも乗る事がありますので」

三人はクルマの話で盛り上がった。竜太はウンザリしていたようだ…。そんなこんなでそれぞれ自宅に帰り着いた。

「お、竜太おかえり」

「ただいま。どうせまた榛名山を越えて配達してこい、だろ？」

「ああそうだ。仕事はしてもらわんな」

隼人は笑いながら話した。竜太の家は焼きそば屋を営んでおり直接販売もするが配達が始どである。車内の匂いが気になるところだがそんな心配は全く無いだとか。

「全く…何だつてあの古いクルマに拘るんだよ」

「あいつは乗り手によってはかなり速い部類に入るからだぞ。配達は出来るだけ早い方が良くからな」

「分かったよ。今日も夜の2時ぐらいに配達してくる」

竜太は渋々頷き深夜の2時まで課題などをして過ごす事にした。一方、竜太も免許だけは父親の力もあって取っている。

「今日も榛名山に走りに行こうかなあ…ゆっこのロードスターも見たいし」

みおは走りに行くか行かないか計画を立てていた。因みに海斗は今日もFインプを走らせる為に榛名山の上りを走るそうだ。

夜：竜太は隼人に起こされあるクルマの鍵を取り配達に出かけた。

「ふわあゝ…眠いけど寝るなよ俺…」

「竜太、いつもの通りで行けよ。ほらこれ」

「分かってるよ。紙コップの水をこぼさずに走りきれだろ？全く本
当に何とかDみただぜ」

竜太は窓から話す。そして紙コップも受け取る。

「じゃ、行ってくる」

竜太はそう言い、榛名山を下る為走っていった。竜太のクルマのエンジン音は、どこかで聞いた事があるような音だったが…。
榛名山に入ると竜太は少し気を起こしアクセルを踏み込んでいく。

「まあただの配達じゃあ楽しくねえしな」

竜太はそう言って最初の緩いコーナーを華麗にクリアしていく。…
と、早速後ろから一台のクルマが煽ってきた。青色のRX-8…み
おだ。

「相手は…ハチロク？うーん…ハチロクのドライバーさんには悪い

けど追い抜かせてもらおうかな」

みおは3速にシフトアップし、加速して八チロクに張り付く。

「…まあ普通に走るか」

竜太も3速にシフトアップし、加速していった。竜太のクルマはそう…紛れもなくあのパンダトレノだ。トヨタのAE86型スプリングターレノGT-APEX。某峠漫画でも活躍した名車だ。エンジンには4A-GEU型1.587L直列4気筒を搭載している。今、お互いの存在をまだ知らない為竜太の相手がみおだとも、みおの相手が竜太とも二人はまだ知らない。もつとも、お互いを知らない方が良い走りが出るかも知れない。それが知っていてかつ同じ学校の友達だったらバトルというバトルにはならないだろう。

二人は同じ距離を保ったまま、走っていた。

「嘘…八チロク相手にこんなに苦戦してしまうの?!」

みおは少し驚いた。だが次の瞬間、八チロクは突然みおのRX-8に道を譲った。何故かは分からないが…。そのままみおは走り去りバトルが強制的に終了した。

「今の八チロク…何で道を譲ったんだろう…まあ、いつか」

一方の竜太は……。

「危ねえ危ねえ…焼きそばが飛び散るかと思っただぜ。全く何だった今日に限って飛び散りそうになるんだよ…」

なるほど、それで道を譲ったのか。それでは仕方あるまい。しかし竜太のクルマがハチロクだったとは…と少し驚いてしまう。そしてその竜太の走りはまるで何とかDのとある青年のような走りだった。

果たしてこれから竜太とそのハチロクにはどのような事が待っているのだろうか…。

ACT・i 様名の八チロク（後書き）

まだまだですね…（^| ^ ;）
次も頑張つてまいります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2473ba/>

KAIDO ~ 峠の伝説 ~

2012年1月6日10時49分発行